

## 「神と家庭」

私達は先々週、士師の時代のさばきづかさ、サムソンについて聖書を見てまいりました。その士師の時代には彼のような「さばきづかさ」と呼ばれる者たちがイスラエルを治めました。しかし、彼らのリーダーシップもイスラエルの民を前にして、最善のものとなりえず、士師記はその書を閉じるにあたり、その時のイスラエルの状態をこのような言葉で締めくくっています『その頃、イスラエルには王がなかったので、おのおの自分の目に正しいと見えるところをおこなった』（士師記21章25節）。

この言葉は各々がさばきづかさのもと、「自分の目に正しいと見えること」をし続けた士師記の400年におよんだ年月がいよいよ行き詰ったということをお話しています。そして、その理由はイスラエルには王がいなかったというのです。もし彼らを治める王がおれば、民はもはや自らの目に正しいと見えることに生きるのではなく、王の決めたことに従わなければならなくなります。彼らはそれを望み、そのような時代がイスラエルにもたらされようとしていました。

そうです、この後にイスラエルには初代の王、サウロ、そして二代目のダビデ、三代目のソロモンと王がたてられていくようになっていきます。そして、その初代の王、サウロが王となる時に大切な役割を果たした人が最後の士師であり、また祭司でもあり、預言者でもあったサムエルでした。私達は今日、そのサムエルの名前が書名となっているサムエル記からこのサムエルについて見ていきたいと願っております。

先々週、サムソンについてお話ししました時に、自分の目に正しいと見えるところを行うということは現在の私達も同じだということをお話ししました。私達は「自由」の名のもとに「自分の目に正しいと思われること」をすることを良しとする世界に生きています。ただし、その自由のもとに、私達の目に正しいと思われることが実際に正しいのかということについてはクエスチョンがつき、それは「正しいこと」というよりも、ただ単に「自分がしたいこと」を私達はしているのではないかということをお話ししました。

そもそもなぜイスラエルの民は王政というものを取り入れることを願ったのでしょうか。その時代のイスラエルは各部族の族長がそれぞれの部族をさばいたり、さばき司がいる間は断続的に彼らが民を導いてきました。しかし、それはイスラエル全体を統括するというようなことではなく、イスラエル内部の問題や外敵等、外からやってくる危機というものに彼らが直面する時に、そのままではイスラエルを保つことができないということを彼らは知り、自分達に必要なのは王が民をリードすることであるということにいたったのです。

この状況も今日も変わることがありません。日夜、伝えられている世界の情勢を思う時に、私達はこの国の行く末を案じます。そして、そのために私達は国の先頭に立ってかじ取りをする力強いリーダーシップを求めます。その時代が混迷を深め、先が読めないような時代であればあるほど、私達は強いリーダーシップを求めます。

しかし私達がしかと心に留めなければならないことは、それが王であれ、大統領であれ、総理大臣であれ、彼らとて人間、彼らも「自分の目に正しいこと」をする者であり、そのことが完全に正しいとは限らないのです。もしかしたら、その「自分の目に正しいこと」とは「自分が願い望んでいる」ことであり、最悪の場合、そのリーダーの願望が国政となってしまう、民が苦しむということがあるのです。

その時のイスラエルにとりまして、彼らの行き詰まりは自分達が本来、立つべき場所、すなわち神のもとに立ち返るチャンスとなりえたのですが、そのような時にイスラエルの民は神に立ち返らずに、自分達を導いてくれる強いリーダーを求めました。かつてのイスラエルは「神こそがイスラエルの王」という思いのもとに一致していたのですが、彼らはその思いを捨て、彼らの上に立ち、彼らのために自分達が進むべき道を決める人間を求めたのです。

このような背景のもと、サムエル記はサムエルの誕生に関する記述で始まります。すなわち彼の母ハンナはなかなか与えられない我が子が与えられるようにと必死に神に祈り、遂にサムエルが与られ、その祈りがきかれたハンナはサムエルを神に捧げるべく、幼い時から大祭司エリに我が子を預け、サムエルはそこでエリの働きを助けます。エリはその時にいたるまで40年にわたりイスラエルをさばっていた霊的な指導者であり、同時に国政にまで影響力をもっていました。エリは全てのイスラエル国民に知られており、民を代表して神の幕屋の至聖所に入るような人でした。サムエルはそのエリと寝食を共にし、その薫陶を受けて育ちました。

このように国民からの尊敬を受けるエリでありましたが、彼には一つの問題がありました。それは彼の二人の息子の問題でした。当時、祭司のはたらきは世襲でしたから、この息子達は父、エリの跡を継ぐことが望まれており、彼らもサムエルと同じように父エリのもとで薫陶を受けていました。しかし、彼らは民が神様に犠牲として捧げる肉を横領し、そのことを民が指摘すると、民を脅かし力づくでもその肉を取り上げようとした（サムエル上2章12節-17節）、ある時は主の宮に仕えている女性達と関係をもちました。これらゆえに聖書は彼らを「エリの子らは、よこしまな人々で、主を恐れなかった」（サムエル記上2章12節）と記しています。父エリは大祭司でありながら、神よりもこの子達を重んじ（サムエル記上2章29節）、人がこの子達の噂をすることを聞くにおよんで初めて子供を戒め（サムエル記上2章24節）、さらにはこれらの悪事を知りながらも子達を止めることもしなかったのです（サムエル記上3章13節）。

それゆえに神様はエリの子達ではなく、エリの後継者としてサムエルを立てるにいたりました。かつて神様はエリに仕えていた幼少のサムエルに夜中に何度も語りかけたことがあります。エリは神様がサムエルに何を伝えようとしているのかサムエルに問い、サムエルは師であるエリに伝えることは辛いことなのですが、神様から受けた言葉をこのようにエリに告げます「13 わたしはエリに、彼が知っている悪事のゆえに、その家を永久に罰することを告げる。その子らが神をけがしているのに、彼がそれをとめなかったからである。14 それゆえ、わたしはエリの家を誓う。エリの家が悪は、犠牲や供え物をもってしても、永久にあがなわれないであろう」（サムエル上3章13節、14節）。

エリには心当たりがありますから、彼は弁解をしません。そして、この言葉どおりにエリもその息子達も悲しい死を迎え、サムエルはエリの跡をついでイスラエルの指導者となりました。このサムエルについて聖書はこのように評価しています「サムエルは育てていった。主が彼と共におられて、その言葉を一つも地に落ちないようにされたので、ダンからベエルシバまで、イスラエルのすべての人は、サムエルが主の預言者と定められたことを知った」（サムエル記上3章19節、20節）。

こうしてサムエルはエリに代わり、祭司の役目を担い、国民の霊的な指導にあたりました。このことゆえにイスラエルは王がなくても持ち直していくように思われました。しかし、サムエルがそのはたらきを始め、しばしの年月が過ぎた時、長老たちはサムエルに問題を指摘し始めました。

4 この時、イスラエルの長老たちはみな集まってラマにおけるサムエルのもとにきて、5 言った「あなたは年老い、あなたの子たちはあなたの道を歩まない。今ほかの国々のように、われわれをさばく王を、われわれのために立ててください」（サムエル上8章4節-5節）。

このサムエルにも問題があったのです。私達はこのことに驚きますが、それはエリと全く同じ問題でした。「サムエルは年老いて、その子らをイスラエルのさばきつがさとした。長子の名はヨエルといい、次の子の名はアビヤと言った。彼らはベエルシバでさばきづかさであった。

しかしその子らは父の道を歩まないで、利に向かい、まいないを取って、さばきを曲げた」（サムエル記上8章1節-3節）。

サムエルは幼少の時に、エリの息子の罪に対する神様の厳しい言葉をエリに伝えた人です。エリの息子がどんな悪事をしていたかということを見聞きしていた人です。寝食を師であるエリとしていたということは、彼はエリがその子達に対してどのように向き合ってきたかということを見近に見てきていたに違いありません。ゆえになぜ子供たちが神にそむく生き方をしているのかということも知っていたことでしょう。しかし、そのサムエルの子達も神様に喜ばれるようには育ちませんでした。

ここで私達はこの類の話をして、どこかで聞いたことを思い起こします。そうです、モーセの兄であったアロンの息子たちのことについて数週間前に礼拝でお話ししたとおりです。アロンの二人の息子は祭司としての任職を父アロンから継ぐべき者達でありながら、彼らは神の御心とは異なったことをし、ゆえにその命を失ってしまいました。彼らに祭司としてあるべき姿を教えなければならなかったのは自らが祭司である彼らの父、アロンでした。

その時にお話ししました。弟モーセが神様から十戒を受けるべく山に登っている間に、いつまでも下山しないモーセに対して、麓にいたイスラエルの民はアロンの勧めにより、金で作った牛を拝み始め、どんちゃん騒ぎをしていました。出エジプト記はこの事件について 25 モーセは民がほしいままにふるまったのを見た。アロンは彼らがほしいままにふるまうに任せ、敵の中に物笑いとなったからである」（出エジプト記32章25節）と書き記しています。

自ら祭司であり、その役目がどんなに光栄に満ちているのか、そして、その使命に最も必要なことは神を恐れ敬うことであり、神が定めたことに対しては完全に従わなければならないということを息子たちに伝えるのはアロンの責任でした。おそらくアロンはイスラエルの民に対して「彼らがほしいままにふるまうに任せた」（出エジプト記32章25節）ということをして、その家庭においてもしていたのでありましょう。

それがいかなる民族であっても皆、家族を大切に思います。しかし、ユダヤ人ほどに家族に目を注ぎ、その家族を中心に物事を考える民族はいません。なぜなら例えば創世記一つ取りましても、聖書は家族の物語なのです。ユダヤ人は幼少時代から死ぬまでこの創世記を暗唱するほどに読み続けます。そこにはアダム、イブから始まり、ノア、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフと彼らの家族のことが出てきます。ゆえに彼らがその家庭にまず目を注ぐということは必然の帰結なのです。

当然、このアロン、エリ、サムエルはこの聖書に対する専門家ですから、このことを知っていたはずなのです。そうです、彼らは自分達がなすべき役目というものを知っていました。しかし、彼らはことごとくそのことで問題を起こしてしまいました。

元旦に私は「神の法則」ということについてお話ししました。我々が神によって作られ、この世界の万物が神の法則のもとに動き、そこに秩序があるのなら、私達はその神の世界に生きるにあたり、我々にとりまして最善の生き方とはその神の法則のもとに生きることでとお話ししました。このところから離れれば離れるほど、私達はその人生に混乱を招くこととなります。「自分の目に正しいことをする」ということはまさしく、このことを意味し、私達がそうすればするほど、私達は混乱に包まれていきます。

「秩序」とはすなわち、それが「デタラメ」ではないことで、そこには「順番」があることを意味します。かつて律法学者とイエス・キリストの間でこのような会話がなされたではありませんか。

『35 そして彼らの中のひとりの律法学者が、イエスをためそうとして質問した、36 「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」。37 イエスは言われた、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。38 これがいちばん大切な、第一のいましめである。39 第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。40 これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」（マタイ22章35節－40節）

聖書の中には248の「こうしなさい」という戒め、365の「こうしてはならない」という戒め、すなわち計613の戒めがありますが、イエス様は『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』ということをも最も重要な第一のいましめとし、第二は『自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ』と言いました。そして、この二つのいましめに律法全体と預言者とがかかっている」と言われました。ここには一番大切なこと、そして二番目に大切なこととその順番、すなわち私達が心に留めるべき優先順位が語られています。

主にある皆さん、このところに神が私達に示されているオーダーがあるのです。第一に神を愛する、そして第二に自分を愛するように隣人を愛する。これは時代が変われど決して変わることはない不動の順番だと神様は私達に言われているのです。そして、その隣人の筆頭にくるのが私達の家族なのです。

これがこの天地万物を支配しておられる方が定めているオーダーであり、そのオーダーの中に生きることを神は我々は望まれているのです。すなわち、神第一、家族が第二、そしてそれらに諸々のことが続きます。

私達が常にこの優先順位を心に刻み、物事を決めなければならない時にこの基準を用いてそれを決めていくのなら、私達は大きく道を踏み外すことはないでしょう。この世界の至高の権威をもったお方のルールに従うこと、これに勝る生き方はどこにもないので

す。この基準に生きることの確かさを知った者は、その順番を崩すことはできなくなります。なぜなら、それはシートベルトをせずに車を運転するようなものであり、またその素晴らしさを知っているからです。

しかし、それにしても今日の世界はめまぐるしく、私達は毎日、多忙を極めて生きています。そのような中でこの神の法則に従うということは難しいのではないかと私達は思うのです。ですから、このようなことを話しますと「だから宗教は嫌なんだ。現実を離れて、浮世離れしたことばかりを言っている。そんな順番のことを考えていたら食べていけないだろう」と。

・・・そうでしょうか。いいえ、そうではありません、この順番から外れるときに私達は食べていけないということ以上に深刻な問題を抱えることになるのです。

御存じのように私の母は女手一つで私を育ててくれました。母は誰にとっても大切な存在であります。母とて人間、完全な人ではありませんでした。特にまだ私が幼いころはまさしく、公私ともに多忙をきわめ、私をがむしゃらに育ててくれました。ゆえに余裕もなく、人間の弱さが出たこともあったと思います。言うまでもなく私自身も完全な夫、父親、そして子であるというようことからは遠い存在だとほんとうに思います。それは私の家族が証言してくれるでしょう。しかし、未完成なる者として日々、学びつつ生きています。

私はこの母について、二つの忘れられない思い出があります。彼女は牧師ですから当然、日曜日には礼拝があります。そんな日曜礼拝など眼中なしというように日本の秋にもたれる運動会は日曜日に開催されるのです。ですから、当然、母は運動会に来ることはできません。ですから私の母は私が運動会で走っている姿を見たことはないと思います。そして運動会といえばお昼ご飯です。それぞれの家族がゴザを敷いて、色とりどりの食べ物や並べられ、それを囲んで家族一同が介して昼食がとられます。しかしながら、私にはその時、母がいませんから朝、託されたお弁当をもって、いつも近所の友達の家族の中に入れてもらって、そこで食事をしました。しかし、その食事が始まってしばらくすると礼拝を終えた母が駆けつけてくれました。20分ほどでしたが、一緒にゴザに座り、共に食事をしてまた信徒の方達が待つ教会に帰って行きました。朝の開会式から午後の閉会式まで友達の親は皆、子供を見守り、応援しました。しかし、母が私と共にいれるのはこの20分ほどでした。しかし、私にはそれで十分でした。

もう一つ、こんな思い出があります。私がまだ小学生の頃、腕白盛りの時です。男の子ですから、プロレスが大好きで、金曜日の夜、そして土曜日の夕方に放映されているプロレスに熱くなり、いつも友達とプロレスの技を駆けあっていました。とにかく子供というのはエネルギーの塊で、そんなプロレスへの情熱を学校で使い切ることができずに家に持ち帰りました。そんな時、父親がいれば息子の相手をしてくれるのですが、

私にはその父がおりません。そんな息子に対して母は私の四の字固めの練習相手になってくれました（皆さんの中には私の母のことを知っている方もいるかと思います。そうです、あの母が私の四の字固めの相手となったのです。信じられますか）。もちろん、そんなことを毎晩することはありませんし、それ自体は二日、三日、10分程度の出来事でした。しかし、私はその時のことを今でも忘れることができませんし、これからも決して忘れることはありません。よく言われるように、時に家族とのかかわり合いは時間の長さではなく、その時間のクオリティーであるということを私は信じる者です。

時に母は伝道と牧会に全てを注ぎました。大抵、家に帰っても母は家におらず、時には自転車で遠くにまで訪問に出かけ、日が暮れても家に帰らないこともよくありました。そんな時にさみしい思いもしましたが、時に我が子を忘れてまで没頭する教会のはたらきに対して、母の気迫というものを感じ取り、そこに本物の匂いを幼いながらに感じ取りました。「本物」とは時に我が子をも忘れる、そこにかかる妥協のない真剣な背中から感じ取るものなのです。

アメリカに来て、子供のサッカーの試合があるから礼拝をやすんでその試合観戦に行ったなんていう牧師のことを聞いたことがあります（もちろん、それは礼拝での自分の役目を放棄したのではなく、他の者に託していったということでしょう）。「おのおの自分の目に正しいことをした」ということであるのなら、私達には知りえない事情もそこにはあったのかもしれませんが批判はしません。

しかし、このことには大切なことが隠されています。その子はお父さん、お母さんが礼拝に行かずに、自分のゲームを優先して見に来てくれたということを楽しんだことでしょう。しかし、同時にその時、それと引き換えに私達はあるメッセージを子供の心に刻んでいるのです。そう、それは「サッカーゲーム」は「神様」よりも大切なのだというメッセージであり、そのことは神とは所詮、いつでも他のものをもって後回しにしてもいいものなのだというメッセージです。こうして神第一という優先順位は失われていきます。その時は何もないかもしれません。しかし、この優先順位が崩れていくことは後々、ボディブローのように効いてくるのです。

状況によっては妥協せず、子を顧みることがないほどに主に関することに没頭する、そのことなくして本物を伝えることはできません。そして、そのことに対して後にクオリティーあるものとして、しっかりとフォローするのなら、子供はそのことを理解し、受け止めることでしょう。

11 これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである。12 だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい（1コリント10章11節-12節）

揃いも揃って三人の偉大な霊的教師がその家庭において問題を抱えていたということ、このようなことが聖書に書き残されている理由があるとすれば、まさしくそれは私達に対する警告と訓戒のために他ならないのです。

イスラエルという国が直面していた大変な状況の中で、聖書はその渦中にいた者達の家庭に目を注いでおられたことを私達は見過ごしてはなりません。人は大きな夢をもちます、国を自ら動かしたり、会社をもち、経営するというようなこと、新しいプロジェクトに対して辞令をいただくことは私達を魅了することでありましょう。しかし、それ以上に神様から直々に託されている者達に私達の心を向けることはもっと大切なことなのだとして聖書は私達に語りかけるのです。

主にある皆さん、愚直に試してみませんか。神第一、家族が次、そして、あなたのなすべき諸々のことが第三、この基本的な我々の神が私達に与えておられる優先順位に生きるのなら、私達はその生活の中に変化が見えてくるはずですよ。「そんな時間ありません」ということも不思議と解決していきます。この順番を入れ替えて自分の目に正しいことをしていることのほうが多くの時間をロスしていることに気がつきます。後になり諸々の問題が噴出してきて、それを修復するために要する時間と苦勞を考えるだけでも、今からこの順番を意識して、生活をもう一度、建てあげていくことこそが最善の生き方だとは思わないでしょうか。

歴史をやり直すことはできませんが、もしエリやサムエルが自らの家庭を治めることができたら、イスラエルは王を立てる必要がなかったかもしれません。そう考えますのなら、私達の家庭と国政は区別されるものではなく、それはつながっているのです。一つ一つの家庭は小さなものでありますが、その家庭は私達の世界の最小単位の社会であり、その社会が無数に集まったものが国家なのです。「国の平和」が叫ばれますが、このことの実現は「神と共にある家庭における平和」の先にあるのです。私達の人生も過去に立ち返りやり直すことはできません。しかし、今からでも遅くはありません。今からでも私達の人生の優先順位を見つめなおしませんか。神の祝福は私達の手の届くところに、昔から、既に今も、そして、これからもあるのです。最後にあの有名な「ナルニア国物語」を書いた C.S. ルイスの言葉をもってこのメッセージを閉じたいと思います。

「もし、私がこの世で一番愛するものよりも神を愛するようになったら、この世で一番愛するものを今よりもっとよく愛せるようになるでしょう。この世で一番愛するものを愛するために神をおろそかにするようになるならば、かえってこの世で一番愛するものを全然愛していないという状態に進んでいってしまうのです。第一のものを第一にする時、第二のものは抑えつけられるのではなく、むしろ、さらに広がっていくのです」